資料３

障害児入所施設（医療型）の課題整理

発達支援機能について

【課題】

医療型の対象者は、一般的に、状態安定のための支援が日常的に必要不可欠であるが、それとともに成長・発達のための支援をどのように考えるか。
・教育との連携強化、同年代との交流の推進（インクルーシブ）
・日中活動も含めた暮らし全体の在り方
・医療的ケア児等への専門的支援の強化
・施設の小規模化等の推進

（これまでの検討会における意見）（※事務局の責任においてとりまとめたもの）

・　日中活動以外の部分（朝・夕）でどういう関わりができているか。暮らしという視点を持つことが必要。（田村副座長）
・　生活部分において、医療的な重軽関係なく、最善の利益が暮らしの中で保障されているかどうか点検する視点が必要。（田村副座長）
・　医療的ケアが濃厚な子どもたちは感覚機能がうまく働かないため、働きかけに対する応答が乏しい状況がある。子どもたちへの見立て・それに基づいた支援の在り方が十分に確立されていない状況にあるのではないか。（菊池構成員）
・　医療的ケアが濃厚な子どもたちは、就学前に他の子どもたちと交わる機会が少ないと思われる。子どもたち同士の関係の中で育ち合いがあると思うが、そういう機会の提供を具体的に検討すべき。（菊池構成員）
・　超重症児の学齢期の子どもの場合、学校になかなか通えないので特別支援学校から病院内訪問にて子どものベッドサイドにて教育を行っている。子どもの一生涯の発達を見た場合、教育と医療がどのように両輪で進んでいくべきか考える必要性がある。（菊池構成員）
・　看護師が持っている子どもの印象を学校の先生に伝える。学校の先生が子どもの反応の様子を捉えて看護師にフィードバックする。どんなに障害が重くても、そうした関係の中で子どもは育っていく。（生活面での）子どもの発達という視点からも考えていくことは必

要。（菊池構成員）

- 都道府県の教育委員会によって入所施設における学校教育への取り組みに違いがある様子。院内教育の県もあれば、特別支援学校より普通学校に通学させる考え方を持っているところもある。教育との連携という意味合いでも、そういうものをきちんとしてあげないと子どもが育たないと思う。（石橋構成員）
- 日中活動の在り方を見える形にする必要性がある。（木実谷構成員）
- 小規模化あるいはユニット化といった部分が足りないのではないか。
（難病の子ども支援ネットワーク）
- （ICT セラピストについて）言語以外の意思表示ができるような支援、本人が周りの状況を見られるような感覚の補助を希望。（全国医療的ケア児者支援協議会）
- 小規模化あるいはユニット化といった部分が足りないのではないか。
（難病の子ども支援ネットワーク）
- 障害に関する専門性の更なる向上とともに、アタッチメントの発現が遅れる場合の受け止めや、家族・家庭養育の支援、また市町村や児童相談所などとの連携の強化が必要である。（全国乳児福祉協議会）
- 重症児にしても医療的ケア児にしても、コミュニケーションは非常に困難。自分から何かを要求したり、積極的に動くことが困難な方が比較的多い。そういう方に対する支援に対してはスタッフをいかに研修し、育成・教育していくことが問題だと思っている。

（全国重症児者デイサービス・ネットワーク）